

「大坂冬の陣図屏風」解説

葵区徳川みらい学会が講演会



「大坂冬の陣図屏風」の復元プロジェクトを振り返る木下氏＝静岡市葵区の市民文化会館

徳川時代の歴史的意義を研究、発信する「徳川みらい学会」は8日、本年度の第4回講演会（静岡商工会議所共催）を静岡市市民文化会館で開いた。「再現された大坂冬の陣図屏風（ひょうぶ）をテーマに、凸版印刷文化事業推進

本部のクリエイティブディレクター木下悠氏が登壇した。

「大坂冬の陣図屏風」の復元プロジェクトに携わった木下氏は、東京国立博物館が所蔵する「大坂冬の陣図屏風」（模本）は徳川将軍家の御用絵師を務めた木挽町の狩野家に伝わった作品で、1886年に同家の狩野謙柄氏から寄贈された

と解説。加筆修正は最小限にし、画面に書き込まれた彩色指示を最大限に生かして復元図を制作したと振り返った。

原本の作品が描かれた時期については「合戦の様子が細かく正確に写されていて、合戦からそう遠くない時期に描かれただろう」と説いた。

静岡大名菅教授で同学会長の小和田哲男氏もリモートで講演し、「大坂冬の陣」の史実を解説した。（社会部・北井寛人）